新琵琶楽ー旭荘外十氏

○…洲水会演奏会　十一月八日夕　蘇江市民会館（主催同会）　詩吟琵琶教室ー吉野洲水　吉野懐古ー山本重吉　男涙の子守唄ー斎藤秀之　井伊大老ー内田景水　白虎隊ー山脇圭水　舟弁慶ー金沢八田夏水　高松城ー京都田中旭法　城山ー富山田中歴水　戦艦大和ー京都矢吹旭美津　龍の口ー金沢水谷充水　新撰組ー会主吉野洲水

○…秋季演奏会　十一月九日昼　東京証券ホール（主催榎本芝水）　父乃木将軍ー吉田榎水　国船ー木村貴則　春日野ー菊地志げ子　千曲川旅情の歌ー近藤司川　城山ー柿木昌水　楠正成ー大森和水　紅葉狩ー会田映水　桐一葉ー小嶺沢水　川中島ー長野秦水　湖水乗切ー野池信水　雪晴れー小林了水　山科の別れー太白詩水　本能寺ー加藤斐水　西郷隆盛ー安藤敬水　石童丸ー会主榎本芝水　外に剣舞二

○…錦心流演奏会　十一月九日昼　名古屋中小企業福祉会館（主催花友会）　富士山ー合吟　金剛石ー成田泰弘　紅葉狩ー中西将泉　月下の陣ー松尾暉水　城山ー坂井田花風　河内の宿ー渡辺花昇　霧の川中島ー谷津花水　菅公ー大西弦水　茨木ー小林残水　十五の森ー神藤敏水　白虎隊ー菅沼響水　大楠公ー合吟　西郷隆盛ー丹野鯱水　本能寺三輪花水　湖水乗切ー谷津壮水　小栗栖ー水谷浩水　枚方堤ー奥村慧水　楠正成ー大阪尾山好水　龍の口ー東京小山田賞水　木村重成ー東京谷暉水

○…雅翔曲婦人部研究発表会　十一月十日夕　東京新宿安田生命ホール（主催稚翔曲研究会本部）　千曲川旅情の歌ー村上雅蓉外　本能寺ー柴田雅舟、佐藤雅誘　山吹の里ー酒巻雅譲、松村雅恭、長島雅珠　静の舞ー小川雅翠、塩田雅香、河野雅操　生花茶の湯ー川口雅穂、鷲田雅鈴　菅公ー白倉雅旭　金洲城ー甲田雅順　白虎隊ー永井雅恵、荒井雅白、河合雅奏　苦吟の道実ー井上雅蒼　千賀雅扇　曲垣平九郎ー賛助新部桜水　旅僧と蛾鶯ー宗家井上雅翔　荒城の月ー有志外に吟詠二〇

○…吟詠と芸能まつり　十一月十五日昼夜　函館吟詠連盟）　吟詠吟舞、尺八、箏、木琴、義太夫等七十七題の外琵琶構成吟「天と地と」ー琵琶高橋蘇水、語り高橋敦子、吟詠田村、村山

あとがき

どうも世の中の事がさっぱり解らなくなって来た。京絃前号掲載の西郷隆盛が細身で精悍な体軀で六尺豊かな豪傑型を頭に画いて「城山」などを演奏していた琵琶人の夢を毀されたり。或は本紙二月号から古今の忠臣大石内蔵助が思いもよらぬ色好みの最たるものであったり。「日本建国の謎」では人皇十代の崇仁天皇は実はニニギノミコトで、神武天皇は仮設の人で本当は応仁天皇を神武天皇として祭り上げたり。朝日新聞連載大仏次郎氏の「天皇の世紀」では思いも寄らぬ歴史の喰い違いが多々出て来るし。そうかと思うと親のスネを噛じっている最高学府の青年が火炎瓶やゲバ棒で何の罪もない一般市民や民家の大切な商売道具を焼いたり傷つけたり。自動車が大道狭しと大威張りで罷り通って、人間のために造られた道路なのにその人間が道の隅ッこで小さくなっていなければならなかったり。立派な日本語があるのに無闇矢鱈と英単語を使ったり、男か女か見わけのつかぬ長髪で得意然としている男性が居るかと思うと、膝小憎丸出しのミニスカートで、あたら大和撫子の名を台なしにしたり。琵琶の世界に於ても東京の鈴木鉦次郎氏が斯界発展の一助にもと私財を投じて功労琵琶人に贈られる金盃や、一昨年京絃社が同様の主旨で琵琶人に頒布したゆかたなど、売名的だ金儲け主義だなどと人の気も知らないで悪口を云う輩があったり。一体世の中はどうなっているのか、月面に星条旗を建てて帰って来る現状では何も彼も〝不可解〟の一語に尽きる。やがて琵琶もさかさまに持って弾奏する時代が来るかも知れぬ

昭和四十四年十二月一日発行（非売品）
〒603
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
京都市北区衣笠西馬場町二九
和田才一ビル　二〇一号
電話（四六二）八三二六
内線　二〇一番

琵琶機関紙
京絃
第一八六号　京絃社

芦光氏を偲びて

附・琵琶界の現状を憶う

生重定

明治・大正と隆盛を極めて来た琵琶が次第に斜陽への道を辿ろうとしている時、足立芦光氏の如き巨星を失った事は琵琶界の大きな損失でした。

芦光氏と旧知の如く交遊を深くしたのはつい戦後のことであり、その全盛期のことは親しく知りませんが、芦光氏が宗教琵琶を創始して活躍された頃が最も充実した得意時代ではなかったでしょうか。琵琶の流行につれ次第に大衆化されつつあった時に、それは琵琶の権威を支える一つの運動でもありました。その博識は一介の琵琶人として絃界の一隅におさまる様な存在ではなかった。「川端龍子は画家にしておくには惜しい人物だ」と云われましたが、「足立芦光は琵琶人にしておくには惜しい人物だ」と云われないでしょうか。氏の多才ぶりはその「音楽漫談」に於てよく覗う事が出来ました。音楽全野に亘って縦横の談論自演はまさに異色の演出でした。

芦光氏は「青雲」の愛器を提げて琵琶界を席巻しましたが、舞台人としての芦光よりも論客として一層その面目躍如たるものがありました。論調興に入れば滔々として止まる所を知らず、誰もこれに打ち込む隙を与えない概がありました。そして「今日の対談を録音して置けば面白かったのに」と破顔一笑した氏の俤はまだ消え去らない。

指導性を持たない概念的批評には何の価値もない。氏の芸評には指導的裏付けがあり、自信に満ちたものでした。批評は本来厳しいものであることが原則ですが、耳の痛い苦言は多くの琵琶人から敬遠せられたものです。そして自己陶酔の安易道を歩んで来た所に、今日絃界現状の一面が覗われる様に思われます。正しい批判のない所に真の進展はない。琵琶界危機が叫ばれている時、惜しい論客を失ったものです。

今日琵琶界不振の原因に就いて種々論議されその将来を案じられていますが、多くの人々は琵琶歴を誇る五十年、一日の如くただ飽くことを知らず旧態依然、自ら弾じ、自ら語り続けています。そして云う「琵琶ほどむつかしいものは無い」と、半世紀に亘る人間の歳月は、琵琶と云う美しい女神の若さに最早やついて行けず、徒らに老化して了った私達です。

誰かその権勢をもって西山に傾く落陽を蹇くことが出来るでしょうか。現状のままではあと十年を憂うる人もあります。新人の抬頭に望みをかけると云っても、古色蒼然たる芸風の踏襲だけでは何れは同じ道の繰り返しに過ぎないでしょう。

琵琶は今その核心が大きく揺れている。末梢的な手術では到底その蘇生は望まれない。琵琶とは何か、音楽とは何か、その才一歩から出直す時機に直面している。琵琶は文化財と云う芸術の墓場で仮睡の夢を貪るよりも、寧ろ潔よく滅び去って了う方が琵琶らしい最後でしょう。「落つべきものは皆落ちぬ、死すべきものは皆死しぬ」と云う「壇の浦」の殺し文句の如く、滅び行くものをして潔よく滅ばしめよ。そしてそこから新しい生命が誕生する。

琵琶は拒否反応の強い女神であり、他の音曲をそのまま移入しても、また琵琶を他の曲中に移植してみてもそれは育ち難い。琵琶を生かす道は琵琶自身の声に耳を傾けるより他に道はない。琵琶は長い間何かの道具にしか使われていなかった。抑圧された彼女は今何かを絶叫しようとしている。彼女の心を満た

ることが出来たら、彼女はあなたのものとなるでしょう。

琵琶の美しさ、気高さ、そして華かさの中にある哀れさ、それ等を知ることは出来てもそれを表現することは至難です。乱世に一代の名将は出現する、琵琶復興は未だ道遠しの感がありますが、衰退の琵琶界にこそ待望の天才が生れることをひそかに信ずるものです。

（執筆者の諒解を得て「美世」誌から転載）

狂酔亭漫録（四十九）

古谷竟水

前回まで飛び飛び乍ら数回に亘って大石内蔵助に就て記述したが、之は一先づ打切るもまだ浪士達の銘々伝もあり、詳述すれば現在私の手許の資料だけでも本稿数百回分もありとても命が続かない。依て残念乍ら之は棚上げとして、愈々討入の件に移る事とする。

元禄十五年十二月十四日、其日は端なくも二君の忌日に当るので大石始め重立つ同志十余名が泉岳寺に集り、是が御名残の御暇請として冷光院殿墓前に会し、今宵の勝利を黙禱の上、方丈を訪い「今日は亡君御命日とて参詣致した。我々同僚は近々四方へ離散致すので再会の程も覚束なく、永い別離を惜しむため御一室にて御斎に預り度く御許容下されたい」と申出で白銀三枚を呈出した。

室鳩巣の義人録は此金額を誤て白金三百両と記しているので後世まで三百金と伝わっているが、之は現今の三百万円以上に相当し、大石程の智者が事前に此の様な目立つ事をする筈もなく、又そんな金は無かった筈である。

さて此の泉岳寺に於ける大石の打合せ訓令を略述すれば、今宵討入の一党四十七人を甲乙二隊に分ち、大石は甲隊を以て東面の表門より、伴主税は乙隊を率い西面の裏門より攻ケ所に参集する事、又此等の件を義徒一同に申伝える等の打合せであった。

此の参集場所三ケ所とは、才一は本所林町堀部安兵衛宅、才二は本所三ツ目横町杉野十平次宅、才三は本所相生町神崎与五郎、前原伊助同居の米店であり、此の才三の場所は吉良邸に近く、或は門前とも称し、今宵吉良邸茶会散会の時刻を覗うには最良の地点である。

此の辺に世間の誤伝が多い。前記泉岳寺の一部集合を全員集合と伝えるもの才一、大石が此の夕故主の未亡人遙泉院を訪ねる所謂南部坂雪の別れが才二、討入直前うどん屋久兵衛方へ全員集合というのが才三、皆嘘伝である。南部坂の件は本稿才四十二回で記したが、才三の件に就ては「寺坂談」という史書に、「本所うどん屋久兵衛方へ参候も虚説なり、上野介殿近所と申、左様卒爾なる事無之候」と明瞭に否定されている。

さて話が大分固くなったので、茲で義徒の最長老七十六歳の堀部彌兵衛の立出の模様を確実と見られる資料に基き御披露する。

其日大石は小野寺十内と竈を連ね宵に石町の寓居を立出で、途中両国矢の倉米沢町の堀部彌兵衛宅へ立寄った。老人は聞えた武辺でその家族も家風に従う人々で、昼間から討入祝を準備され、古式に則り勝栗、よろ昆布の取肴に、敵の首級を挙げる縁起の寒鴨に、菜鳥の吸物まで用意されていた。義徒も追々に参集し茲で出陣の酒宴が開かれた。盛に盃を廻す間に子の刻（十二時）に達したので大石は一党への指図もあれば一足お先にと別れを告げ、林町の堀部安兵衛宅へ駈付けた。

彌兵衛老人は討入時日の確定の際から意気衝天の勢で、年こそ老いたれ、其場に於ては何ぞ後れを取るべきぞと勇み立っていたが、十三日に至り大雪になったので気を焦ち、討入の節門の扉を打破る可きか、或は長屋の屋根を乗越す可きか等と配慮を重ねながら其夜は枕についたが、心神の結ばれる所夢となる譬えの通り夢の中に一句を得た。曰く

雪晴れて心に協うあした哉

翌朝目覚めた折此の句はまざまざ記憶にある。然るに不思議にも十四日は大雪も追々晴れて来たので、さては霊夢であったかと感激し、今宵の勝算疑いなしと確信したとある。その為か彼は朝から祝酒を酌み、量を過した為か睡気を催し「参集場までは程近し、未だ時間もあれば今の間に一睡せん。時刻来らば起して呉れ」と家族に頼み、肱を枕に高いびきであった。この心境の余裕こそ大丈夫の鉄石心の現われである。

時刻来って揺起され「アア元気が回復した、さらば直ちに打立とう」と得意の長槍を杖に立出でようとする。娘のお幸が「父上、今夕のお動きには短槍の方がよいかと存じます」と注意すれば「左様左様、流石我娘ちゃ、よく気が付いた」と大機嫌で、其場で槍の柄数尺を切捨て、石付きを削り込み「アア心地よし」と家人に別れを告げ、雪を蹴立てて神崎前原の宅へ急いだとある。（以下次号）

新年特別号発行について

一月一日発行の本紙は例年の通り正月特別号とし、紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京紘援助の思召しをも含めて多数御賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添えて十二月十日迄に御申込み願上げます。

維新前後（中）

桂旭采

その挙骨和尚こと義堂は、滴水と共に岡山の曹源寺義山和尚に参禅した人で、そのころ下嵯峨の宝王院に住んでいた。京へ出るには馬上豊かに打跨って替え馬を曳き、さながら武蔵坊弁慶を見るようであった。

或る夜、長州藩の志士をつれて四条堤を通りかゝると「またれいッ」バラバラと数人の侍が和尚を取囲んだ。見れば会津見廻り組の隊士達、鉄砲を持ち刀を振りかざしている。

すわッ、長州の志士達もサッと鯉口を切った。そのとき和尚の大喝が轟いた。

「無礼ものッ、わしは天龍寺の義堂じゃ。」

「……。」

「夜中とは云え天子様のお膝元で鉄砲を振り廻すとは何事じゃ。」

「み、見廻り組でござる。」

「隊長は誰じゃ、呼んで来い。花の都を荒す馬鹿もんに、わしが説教をしてやる。」

その問答の最中に先斗町（ぽんとちょう）のあたりから更に数人の侍が馳けつけて来た。見れば土方歳三をはじめ泣く子もだまる新撰組の面々ー。

「何事だ。」

「このご坊が…。」

見廻り侍達は新撰組の応援で急に元気を取り戻した。

「ふうむ、矢張り説教をしてやらねばならぬと見える。」

「云うなッ、坊主ッ。」

隊士達は刀を振りかぶった。和尚はぐうッと拳（こぶし）を突出した。

「おれに任せろ」一歩前に出た土方は居合い腰になった途端、あッと驚いた。大きな拳がぐんぐん眼の前に迫って来る。それが壁のように拡がり自分を押つぶしそうである。〃しまった、これが近藤局長の云っていた挙骨和尚か〃刀の束に手をかけたまま土方はすくんでしまった…。

ー「土方君、わしは今日恐ろしい坊主に出逢った。」

「局長が恐ろしいなんて。」

「いや本当だ、島原からの戻り道で、一軒の古道具屋で碁盤を見ていた坊主がある。〃手許に金が足りなかったのか、坊主は〃亭主、あとで貰いに来る〃と手附金を渡したあとで、碁盤を裏返して挙骨でごつーん、碁盤には拳の跡がくっきり。」

「まさか」

「いや本当だ、あの坊主だけには手を出さぬよう、隊士達に伝えて置いて呉れ。」ー

ー近藤局長の云っていた挙骨和尚というのがこの坊主かー。

「カーッ。」

「まいった。」和尚の一喝に土方は思わず膝をついてしまった。

「ご坊、失礼仕った。」
「そうか、解ればそれでよい。」和尚はもう笑っていた。
「見ろ、お前達が物騒なものを振廻すので、わしの供がふるえておるわい。」
その供の者とは桂小五郎を始め長州の勤皇志士達だった。
見廻り組や新撰組の隊士達も全く手が出ない、目ざす桂小五郎を眼前にしながら、みすみす之を取逃してしまった。（未完）

続。琵琶界物語（二一）

私の企画した琵琶発展策（4）

清水史水

昭和二十七年春「武藤山治」、三十二年春「武藤山治翁の最期」を自作し、この二曲を提げて鐘紡関係の全国事業場四十五会場を巡演、演奏に先だち武藤翁一代記の講演と翁の詩吟数扁を朗詠の後右二曲の歌詞印刷物を聴者全員に配布、その回数は八十余回に及んだ。

その巡演の途次九州宮島神社や、南洋ジャングルに似た島で有名な青島、その昔菅公が流罪幽居の地梅林に囲まれた太宰府、中津市外奥の山峪耶馬溪を見上げ見下す洞岩の連なる奇景の山道を琵琶を抱えて約十キロ歩き、「恩愛の彼方」で歌われる青の洞門附近の絶景を心ゆくまで歓賞したが、曲の主人公禅海和尚が今の新潟県柏崎市の出身と知って、歩行何百里の難行を憶い先人の苦業に堪え得た人間としての崇高さ、意志の強さに心から感銘した次才である。

大阪城前の国民会館で武藤翁二十年祭に出演の際、故野村吉三郎海軍大将と同席して会談した事や、明智光秀の坂本城跡から湖北長浜市に至るバス一時間の車窓に展開する湖景を眺めて「湖水乗切」の当時を偲び、或は長野善光寺とその背丘にある苅萱堂に詣でて「石童丸」の哀話を涙ながらに追憶したことなど、どれも思い出の種である。

昭和三十二年夏から神戸海浜公園の外郭に在る鐘紡舞子クラブを会場に、関西琵琶人による各流派の研究会を企画し、三十五年まで七回、三十六年秋須磨寺講堂に会場を移して四十二年春まで研究演奏会を主催する事十七回に及び、その後は休会の状態にある。琵琶道の発展策には色々の方法があると思うが、マスコミの現在では前述のような各地の集団を対照とする巡演企画は不可能であろう。

筆者は現在、一般大衆向の琵琶曲や作詩を試みているが、昨年は登山会歌として自作「百寿会鉄拐山道場の歌」を同集会で三回公演し、五月勤務先の社屋新築ビル完成祝賀会に漢詩を自作朗詠、又六月には須磨寺本堂で催された愛山物故者合同追悼会に自作「愛山物故者追悼曲」を、九月の敬老の日には須磨公会堂に於ける敬老会で約八百の聴者に歌詞印刷物を配布して、右「道場の歌」、十一月登山グループの才一回叙勲者祝賀会に自作祝賀歌曲をそれぞれ演奏。本年に入って二月親戚の還暦祝詩を作って朗詠、四月須磨寺講堂に於ける同総会に右道場の歌、六月登山グループ才二回叙勲者祝賀会に祝歌曲を自作演奏、同月神戸市光堂寺で愛山物故者追悼会に自作詩朗詠、九月須磨公会堂の敬老会には約一千の聴者に歌詞印刷物を配って道場の歌、十月十八日須磨創価学会明神台ブロックで六十名の聴衆を前に「龍の口」を演奏するなど、筆者の斯界に於ける活躍は枚挙に暇ない有様である。

鈴木鉦次郎氏に感謝の会

爽秋の十一月一日東京上野公園不忍池畔の精養軒で首題の集いが催された。鈴木氏は衆知の通り琵琶楽発展の熱意に燃え、その一環として数年に亘り私財を投じ、約五百の薩筑各流派功労者に金盃、褒状などを贈ってその功蹟を讃えて居られるが、今回芸の友社や斯界一流の琵琶人など二十四氏が発起人となり、全国に檄を飛ばして此の企画に参加を慫慂したところ、鈴木氏の徳を慕って地元の東京附近は云うに及ばず、遠く東北、奥羽、関東、関西各地から馳せ参ずる者約百三十人（外に記念品贈呈のみの参加二百七十余人）に及び流石に豪華を跨る精養軒も狭しとばかり、今日この盛況を見るに至ったのである。

立って謝辞を述べる鈴木氏

会場は二階大広間に櫛の歯型に席を設け、正面中央に白菊の造花の大輪を胸に紋付袴の主賓鈴木氏、その左右に琵琶評論家吉川英史氏や発起人など三十名が威儀をただし、正面席と直角に福、寿、松、竹、梅などの立札をつけた九列の長卓に流派を同じうする者同志が向い合って着席、シャンデリヤ輝く下には盛花がそれぞれ配置されて、誠に華やかな光景を呈した。

定刻、まず発案者芸の友社長鈴木誉士氏が開会の挨拶と経過発表のあと、司会者望月啞江氏の指名で辻靖剛、雨宮薫水両氏が交々立って祝詞を述べ、続いて山崎旭萍、水藤錦穣両女史によって記念品と花束が一同拍手の裡に鈴木鉦次郎氏に贈呈、之に対し鈴木氏が叮重に謝辞を述べ、各地から寄せられた十数通の祝電披露の後乾盃、引続き宴に移って主客とも歓をつくしたあと、小山田一水会長の発声で鈴木氏の万歳を三唱して七時半世紀の集いを閉ぢたが、この感謝会は琵琶界未曾有の企画というべく、邦楽琵琶史の輝かしい一頁を飾るものとして永く後世に残るであろう。

追而鈴木氏は錦水の号を有し錦心流の名手で特にお伽琵琶の演奏者として広く一般に知られている。

各流派秋季演奏大会

秋晴れの十月二十六日(日)正午から京都琵琶協会主催の首題が開催された。新装成った京都東山松原の安井金比羅宮会館大広間は誠にすがすがしく、超々満員の会場整理に係員は汗だくの体で、六時四十五分の閉会まで殆ど席を立つ人もなく充実した会に終始した。

多彩な全二十二曲のプログラムは薩摩、錦心、筑前各派の男女出演者を交互に組合せ、また来賓演奏者は成るべく良い時間に組入れるなど番組編成に苦心の跡が窺われ、聴者もそれぞれ好みの流派に熱心に聴き入った。又来賓大阪杉秀夫、静岡森鶴堂、札幌横山岳玲三氏の内、横山氏病気入院のため同市城山会の重鎮広川岳風氏が急拠飛行機で駆けつけて代演され、他の二氏と共に卓越した名演奏で大向うを唸らせた。尚今回は各演奏前に曲目内容の簡単な解説を平井、植村両氏が担当して効果を挙げた。

終演後記念撮影、続いて出演者や関係者五十名が一堂に会して祝盃を挙げ八時目出たく解散した。

（曲目と順演者）七卿落―平井衣子・絃春嶺　五条橋―栃尾旭現・絃旭穂　小栗栖―田華旭順、広瀬旭紫、清水旭翠・絃旭濤　菅公原田恵子・絃旭穂　衣川―山崎旭栄　川中島―森田旭峰　堅田落―戸倉旭嶺　西郷隆盛―田中鵬水・絃華水　水師営の会見―伊吹正陽　青の洞門―梅原旭濤　湊陽江出―平井春嶺　彰義隊―杉秀夫・絃春嶺　橘中佐―小林旭光　龍の口―木村維水　禅師と正宗―矢吹華水　錦の御旗―森鶴堂　栗津の露―中島旭穂　桶狭間―広川岳風　安宅の関―若宮旭登　戦艦大和―植村寞水

『浅野晴風演奏大会』を聴く

ばくすい

十一月二日正午から東京中野公会堂で主記演奏会があり、滞京中の筆者は用事の都合で四時ごろ会場に入ったので、それまでの演奏

は聴けなかったが、丁度本年コンクール才一位に入選して文部大臣賞受賞の山下晴楓氏が若林晴俊氏との掛合曲「常盤御前」が始まろうとしていて、聴く内に両青年の呼吸が完全に合って、若林氏も山下氏に劣らぬ秀技を披露し満場の大喝采を納めた。続いてコンクール才二位の押川旭葉女史の「粟津の露」は実に美事な演奏振りで、特に後半五の糸が切れたが、この時旭葉少しも騒がず、美声で之れをカバーして終りを全うされ敬服した。

日曜日で天気もよく、三、四百人は収容出来そうな会場は文字通り満員の盛況で、晴風会員を主軸に錦心、薩摩、にしき、筑前の各琵琶の外、詩吟舞三十余題が、永田咏滉、菅根嶂風両氏の構成によってその一門の華やかさを多分に組入れ、舞台装置や照明の良さと共にバラエティに富み、九時の終演まで聴衆に飽かせる感を与えなかったのは大成功であった。特に琵琶舞「白虎隊」（琵琶望月啞江、吟菅根嶂風、尺八堀井小二郎、舞四女性）では、舞台後ろの垂幕に鶴ケ城の偉容と、その周辺が炎々と燃え上る光景をフイルム構成で浮ぼりにして、少年白虎隊の活躍と荘烈な最期の模様を切実に現わし、また琵琶舞「屋島回顧」（琵琶水藤錦櫻、新部桜水、藤波桜華、舞永田咏滉外二女性）は、特設花道を使って平家没落の様の回顧を舞によって遺憾なく表現し、にしき三女史の完璧な琵琶合奏と相俟って深い印象を与えた。

尚会主浅野晴風氏の物語琵琶「高瀬舟」（絃水藤錦櫻師）は健康の不充分な身体でよくこの難曲をこなされた熱演に惜しみなき拍手を送りたい。（曲目と演奏者「よもやま」欄参照）

日本琵琶振興会例会

後一時から東京新宿駅前歌舞練場に於て九月例会開催、佐藤旭天紅、大沢妙水、坂本純一、吉川域水、望月啞江、速見はる、三島窈水、田中旭公、伊藤旭敏、井坂旭良、松本譜水、山木岳盛、太白詩水、安藤敬水、大井錦淀、鈴木密水、西村錦風、原田旭鳳、芹沢百華、鈴木鶴鵬、松村旭奎、酒井旭華、普門義則の諸氏熱演、九時散会した。尚当日来会の色別ー錦心流27、正派4、にしき2、筑前11、詩吟関係4、計48名

②十月例会は二十五日午後一時から同所で開催し井坂旭良、桑原渉水、山崎光水、佐藤旭天紅、鈴木密水、西村錦風、杉山清峯、川喜多旭麗、西郷天風、山本隆水、山木岳盛、村木桜柳、石崎旭匠、速見はる、山田洲鳳、芹沢百華、原田旭鳳、東錦童、三田村錦霞以上十九氏が熱演され八時五十分閉会した。当日の来場者は錦心流23、正派3、にしき2、筑前7、詩吟関係3、計38名であった。尚本月に限り日時変更をしたが来月からは従来通り才四日曜日に同所で開催する。

京都安井金比羅演芸会に琵琶演奏

十月九日夕上記の催し に京都琵琶協会員小林旭光氏が「敦盛」を演奏し他の諸芸と共に参乗者を喜ばせた。

森鶴堂、広川岳楓両氏歓迎会

演奏会に来演の静岡森札幌広川両氏歓迎会を翌二十七日午後三時から京都琵琶協会の主催で会員田中鵬水氏邸で開催し、伊吹、田中、中島旭、中島真、古谷、小林、木村、植村各会員並に四明会の長谷川奥定、藤崎、有馬の四氏が乗り広川（千手の前）、森（潯陽江）両主賓の熱演に続いて出席数氏の倍奏があり晩餐時には一升入宋塗の大盃に並々と清酒を充たして列席者の廻し飲みをするなど楽しいムードの裡に八時半過ぎ散会した。

安倍秀風師一周忌法要

昨年十一月十一日急逝の神流詩吟詩舞四世家元安倍秀風氏一周忌法要が十一月九日京都大徳寺山内総見院に於てしめやかに営まれ僧侶の読経、展墓のあと遠近から集った百数十人の参拝者が残雨作「故安倍秀風先生御霊前へ」を合吟して故人の霊を慰めた。

——（予　告）——

△…京都琵琶協会月例研究茶話会　十二月七日午後一時市内千本出水西入徳雲寺（電話463六九五二番）当番幹事木村維水、平井春嶺両氏。同好者の御来遊歓迎。

△…日本琵琶振興会例会　十二月二十八日東京新宿駅前尾津才二ビル

——（転居・住居表示変更）——

飴谷六水氏　東京都杉並区成田東三丁目三十一番八号に

若宮旭登氏　東京都東村山市美住町一二四七久米川公団九号二〇四へ

言寸 (4)

常盤御前

宮九条院の雑仕、源義朝の愛を受け、今若、乙若、牛若の三子を生んだが、平治の乱に義朝敗死のあと大和に隠れた。後三子を救いたさに六波羅に自訴し、清盛の妾となり、更に一条良成に嫁いだ。京都京福電鉄常盤駅の南源光庵周辺は生誕地でもあり、晩年の居所ともいわれ石塔が残っている。

もと近衛天皇の中

よもやま　（敬称略）

○…第九回秋季演奏大会　十月十九日昼東京銀座交詢社ホール（主催薩摩琵琶正絃会）吹雪の敵ー石黒錦歌　桜狩ー柏木篁道　桜井の駅ー田宮吉平　彰義隊ー村木錦鷹　小松操曰ー鈴木鶴鵬　屋島の音ー三木絃穣　武蔵野ー宮崎岳燈　真白き富士の嶺ー曾我龍城　稲妻間ー石山岳殿　湖水渡ー鈴木鶴岡　その日の東郷大将ー煙山岳想　旅順開城(下)ー遠藤鶴東　赤星崩ー四明会長谷川博章　迷語もどきーギッシュ・ジョージ　小敦盛(上)ー八束一峰　城山ー須田岳誠　岩崎谷ー栗原雨竹　広瀬中佐ー仲川秀邦　月華同(下)ー大村鼓城　台湾入(下)ー吉成登城　小督ー同好会池田天舟　文天祥ー四明会小野鶴彦　長篠の使者ー田中旭嶺　錦の御旗ー同好会安田幸吉　吉野落(上)ー辻靖剛　同(下)ー四明会山之内兼光　本能寺ー岡部錦蝶　鉢の木(上)ー森鶴堂　同(中)ー横山岳玲　同(下)ー佐々木精　曾我物語ー田辺錦波　滝口入道ー関口龍城　潯陽江ー蓬部岳瑞　古曲合奏ー有志

○…各流派合同演奏大会　十月二十六日昼東京都安井金比羅宮会館（本文参照）

○…琵琶と詩吟詩舞の会　十一月二日昼西宮市夙川公民館（主催三浦蓮水会）　青葉の笛ー吉山吟紅　城山ー竹内蓮洲　母堂盤ー木村吟麗　浮舟ー三浦蓮水。舞青柳芳栄　本能寺ー三浦吟光　湖水乗切ー反町紫水　舟弁慶(上)ー井上碧水　菊水の旗ー三浦蓮水　白虎隊ー神戸久内舟水　五条橋ー京都矢吹旭美津　小松の操(口)ー京都平井春嶺　琵琶塚ー神戸蔵本司水　秋風五丈原ー大阪馬瀬槍水　外に詩吟24、詩舞2、剣舞1

○…復活十三周年浅野晴風演奏大会　十一月二日昼夜東京中野区公会堂（主催晴風一門会）　鈴蘭敬華ー望月啞江　城山ー山口青純　仁科信盛ー浅野晴風　天目山ー坂入晴峰、原島青洲　雪晴れー青木晴城　城山の月ー大関英子　本能寺(下)ー加藤錦陽　常盤御前ー若林晴峻、山下晴楓　粟津ケ原ー押川旭葉　恩讐の彼方へー大野偉水、山崎真水　茨木ー石田脩水　名月逢坂山ー鈴木密水　高瀬川ー浅野晴風。絃水藤錦櫻　嵯峨の秋ー谷暉水　琵琶舞白虎隊ー琵琶望月啞江。吟菅根嶂風。尺八堀井小二郎。舞四女性　琵琶舞屋島回顧ー琵琶水藤錦櫻、新部桜水、藤波桜華。舞永田咏滉外二女性　旅ー山下晴楓　高瀬舟ー浅野晴風・絃水藤錦穣　足柄山ー山本鶴声　外に吟詠12、吟舞27

○…東京旭会秋の大会　十一月五日昼東京新宿伊勢丹ホール（主催同会）　巡礼お鶴ー松島かほる。絃旭光　お蝶夫人ー清田旭俊。絃旭陽、旭苑　天の羽衣ー長谷川旭苑。絃旭鴻　華道華の恵みー吉田旭扇。絃旭粧　旭花都、旭蓮　鉢の木ー金森旭彈。絃和風　羅生門ー岡田旭蓮。絃旭粧　未練西行ー藤巻旭陽。絃旭鴻　老公漫遊ー吉田旭明。絃旭静　大高源吾ー宮武旭豊　若き敦盛ー谷口旭節。絃旭静　大徳寺ー太田旭好　頂羽ー田中旭千栄　関ケ原ー原田旭鶯。絃旭鴻　嘘無情ー藤巻旭鴻外六氏　堅田落ー若宮旭登　舞曲、荒城の月ー旭静外三氏　舞扇鶴ケ岡ー宮川旭花都。絃旭粧、旭光、尺八入加羅の兜ー富樫旭桂　忠度ー安倍旭静　那須与市ー原島旭粧　大物の浦ー藤巻旭鴻